

私の資料集成分用法

Voices of User

順不同

藤井 正一・芝浦工業大学教授

ひまな時などには、辞書や百科事典などをパラパラめくりながら、目にとまった記事を読むのは非常に面白く、結構楽しいものである。資料集成分も全く同様で、あちこち開いて眺めたり拾い読みをしていると、思いがけないことを発見してうれしくなる。第1巻の環境編は、自分の専門分野でもあり、編集の責任者として参画した部門なので、かなり注意して見る必要があり、ときどきミスを見つけて身の縮む思いがすることもある。これに比べて他の編は気楽に見られるし、知らないことが沢山あるので、面白いだけでなく実に役に立つ。とくに物品編などは、歴史的な物品まで含まれており、名称だけは聞いたことのある物のイメージが、はっきりすることが多い。今後はなるべく多くの方々から資料集成分を見てくださり、ミスや間違いを見つけた際にはお知らせいただければ、今後の改訂に役立つのでよろしくお願ひしたいものである。

浜田 信義・日建設計設計本部技術室長

たとえば今、図書館の設計について少し詳しく調べたいという必要が生じたとします。そこで早速資料集成分の7巻「建築—文化」を書棚から取り出してページを繰ることとなりますが、まず見るのは巻頭の執筆者リストなのです。

そこには、当然のことながら「図書」の項を担当された方々のお名前が、担当ページとともに並べて記されています。そこで調べたい事項に最も近い内容が記されているページの担当者名を見ると、木野修造氏の名前が出ているというわけです。

あとは、学会の会員名簿が頼りです。木野氏の電話番号と事務所の住所を調べ、面会の約束をとりつけることができればしめたもの。

こんな利用法は、私が資料集成分に少々深入りして内情を知ってしまったからに違いありません。執筆担当の先生方に電話が殺到しないことをお祈りいたします。

高橋 鷹志・東京大学助教授

「ユニーク」な使い方ができないところが建築設計資料集成分の「ユニーク」さであるというのが私の持論である。計画の講義や設計課題の教材として時々使ってはいる。これとて資料集成分に関与された方々の気の遠くなるような努力に報いるには、あまりにも芸のない利用法である。そこで研究室の助手・院生、20人ほどに訊ねてみた。何か有益にあるいは面白おかしく使っている人はいませんか

と。自分で買った者は2人、延3冊だったが、その中のNM君曰く、「物品編のアイソメ図を拡大コピーして眺めていることがある」。残りの人たちは折につけ集成分に接してはいるのだが、正面切って「いかに」と聞かれると答がでてこない。というのも資料集成分が持つ、建築設計に関する「理」と物とが混在して編集されているという性格の故ではないか。私の好みからいえば、「物」集成分に徹した一冊の「物典」として座右にあることが望ましい。「ユニーク」な使い方を期待しないことが資料集成分を洗練させる。

穂積 信夫・早稲田大学教授

たとえば単位空間の巻を開いてみると、どの図にも家具が書きこまれています。その部屋でどんな動作が行われるかがよく分かります。ここで提案するとすれば、家具を白抜きにして、のこりの床面を淡彩でぬってやることです。均斉のとれた割合で床面が浮き上がり、しかもその空間に抑揚があることが分かります。建物の中で生活をするというのはこういうことであり、家具の間隙を流れるように動くことでさまざまな情景が用意されるのです。

住宅の課題がでた時など、単なる間取りで終わらずに、家具を書きこむことです。その時に、ひと部屋ひと部屋の情景を創出するために単位空間が役に立つでしょう。プランの構成や寸法を知ることはもとより基本です。しかし、建築を最後に仕上げるのは、家具と共存する複雑に入り組んだ空間、さきほど色ぬりをしたあの空間なのです。

田中 辰明・大林組技術研究所

「いくそたび繰りしぞ重き広辞苑八十路終りの年も暮れ行く」は昭和60年1月20日付「朝日歌壇」に掲載された優秀入選歌である。広辞苑は多くの情報を内包するもののA5判を採用していることから厚くなり、扱いに苦慮されているご老人の声が伝わってくる。建築設計資料集成分はA4判を採用し、かつ11冊の分冊としていることから、扱いは広辞苑に比べはるかに楽である。11冊すべての重さは14kg、1冊平均1.27kgとなる。私は顕花植物、シダ植物の押し葉標本を作る際、植物を厚い吸湿紙にはさんでプレスして乾燥させている。このプレスとして建築設計資料集成分は2ないし3冊を使用すれば大きさ、重さとも最適なもの、しばしば利用させていただいている。

もちろん、建築に関する情報を得る一般的利用にも重宝させていただいている。ドイツの辞典DUDENにBildwörterbuchという絵とき辞典があり、滞独中に重宝した。資料集成分も建築の用語や名称を忘れた時や知らない時に絵から引いて「ああそうだったか」と用語を思い出し、つい

でにそれに関する情報を得るといふこともしばしばあった。資料集成は1ページ完結ということもあり、寝ころがっても読むことも可能である。年を取っても資料集成は愛読できるであろう。

小泉嘉四郎・東海大学委嘱教授

初版、第2版刊行の頃は、私もまだ若く、書齋にも余裕がありましたので、私の専攻課目以外のものも含まれた全巻を書棚に並べて、「今後どのような設計課題に遭遇しても困ることはない」と一種の保険を付与されたような安心感を愉しみながら眺めていたものでした。

現在は、私もすでに老境に入り、余りにも専攻が固定し過ぎましたし、また書齋に余裕がなくなり蔵書を漸減してゆかなければならない状況になってきましたので、専攻に関連のある集巻以外は備えてはおりません。

ただ追記してお伝えしておきたいと思ふことは、知人のある舞台美術家が「舞台装置デザインの仕事上で、本集を揃えて大いに役立たせてもらっています」と感謝しておられるということでした。

河口 豊・病院管理研究所主任研究官

自らがうろ覚えの平面の形を確認するのに利用することがあるほか、次のようなことに活用している。

当研究所では毎年多くの研修を行っている。院長、看護部長、事務長、若手幹部など病院関係者が多数参加するが、ほとんどの人は建築の講義は初めてとあってよい。そのための具体的事物である建築を抽象的に述べても印象に残りにくく、図を示しながら解説する方が理解してもらいやすい。

そこで系統的に整理された資料集成の図を必要に応じて使用している。図が適度に略されていて分かりやすく、他分野の人々に対する建築計画の教材としても恰好のものとする。

また解説文も示し、建築関係者がどのような考えをもっているかも併せて伝え、建築一般に対する理解も深めてもらうようにしている。

在塚 礼子・埼玉大学教育学部家政学科助教授

利用法と言え、ごくあたりまえに、教材として各巻から必要部分をコピーすることがほとんどである。ただ、設計のための教材ではなく、住居学の講義や高齢化に関する講演の資料なので、やや変則的なものかもしれない。その時の楽しみは、索引で“老人施設”や“老人室”から探し出せる資料以外の思わぬところに、老化に関する優れたデータや、老人同居に適した住戸プランなどを発見することである。各巻別に構成されている資料を建物種別に（縦軸で）集成して利用している方は多いと聞かすが、一般の中にある老人にも適した資料を（横軸で）組みあわせると、高齢社

会の、いい資料集成ができあがるというわけである。こういう視点で見ると、欠けている資料にも気付かされるわけだが。さて、教材として配布したほんの少しの図表から、空間と結びついた物の見方や、絵ときデータの魅力を読みとる学生が時々あらわれる。資料集成を見る楽しみを知った彼らは、博物館学や教育学のレポートのために資料集成を借りて来ると。そんな時、彼らの目がちょっと輝いて見えるのがうれしい。

伊東 正示・早稲田大学安東研究室

何年もの間、資料集成の編集に携わってきましたので、ユニークな利用法など思いもつかず、編集方針通り(?)の優等生的ユーザーだろうと思います。

私は劇場建築の研究者ですが、最近は少しずつ実際の計画にも参加しておりますので、資料集成もよく利用していますが、情報の量と新鮮さといった点ではやはり十分な資料とはいえませんし、時間とともに有効性は減少してしまうでしょう。そこで、現実の時間の流れに対して常に有効であるためには、ユーザーが参加できるものでなければならぬと思います。ルースリーフ式のいわゆるクックブックスタイルの製本にすれば、新しい情報を加えてゆくことができます。また、巻の構成もフリーになり、さしずめ私などは劇場関係のみで1巻にまとめるでしょう。ユーザーが個々に必要に応じた新しいページを増やしてゆくことも考えられますし、学会がサプリメントを出版してもよいのではないのでしょうか。

まだ、もったいなくて資料集成をバラバラにする勇気が出ませんが、分解してしまいたいという欲求を抑えられない日が徐々に迫っています。

野村 欽・日本大学助教授

私は、本書を特別にうまくあるいは頻繁に利用しているわけでもないし、独特な使い方をしていないわけではない。ただ研究室には全巻揃えてあり、必要に応じて利用させてもらっている。

強いて本書の主な利用方法を挙げるならば卒業研究生を対象としたゼミナールでハンディキャプトの生活環境について資料をまとめ、多くの時間をさいて説明していることだろう。

その際ハンディキャプトに関する資料が各巻にわたっており資料作成に甚だ困難であるが、逆に多くの読者に、他の資料と同レベルでハンディキャプトに対する配慮を考えてもらえる利点を考慮すれば、私の感じている不便はとるに足りないものだ、と思っている。

上野 義雪・千葉大学助手

教育・研究の関係から「第3集 単位空間Ⅰ」の人間工学の項を主に利用している。学生には一生使えるものなの

で、購入を勧めるが、値段をきいて簡単に諦めてしまうようである。やむを得ず必要な箇所を切り貼りし、コピーをとって配布するようにしているが、教室のごみ箱にそのまま入れられてしまうこともある。

研究面では自分が担当した箇所をよくみることがある。いかに理解をしていないか、我ながら恥ずかしく思う。「動作空間」の項は住宅の使い勝手の評価資料として、かなり利用している。動作空間のとりまとめの作業は大変であったが、あの頃まとめておいてよかったと思う。

研究室では最も利用率の高い本が、この第3集である。

田辺 峰雄・共同建築設計事務所

私は資料集全巻を持っていません。理由は高価なこともありますが、事務所で必要な箇所を簡単に複写出来ること、また最近情報がすぐに古くなってしまうということもあります。

ともあれ自分で持っていないものの利用法ですから、そうユニークなものになるはずはありませんが、ただ、自分が使う分野は比較的限られていますので、そのジャンルごとの情報を複写して、自分なりに製本して使っています。

各種建物～単位空間～物品といった横割りの編集であるため、こういった私の使い方当初から予想されたことであり「ユニーク」さはないかもしれません。

黒川 哲郎・東京芸術大学助手

大学の建築科の図書室に一式、研究室に一式を、旧・新版そろえて、設計の課題づくりや、その資料づくりに利用している。また個人的には、「環境」「技術」それに私の担当した「物品」を用意して、設計や計画の際に、辞典がわりにしている。

大学では、改訂版が建物種別でないため数冊を繰って、ほしいデータを捜さなくてはならないこと、他の人が使っていて、必要な巻の姿が見つからないことがあって、苦労するが、自分なりの資料編集をすることが身について、ずぼらな性格の私にはありがたい。現在私が編集にたずさわっている学生版資料集成は、もっとずぼらな学生のための新企画のようだ。

設計の際は、手前みそではないが、「物品」を一番多く利用している。たとえば、医院の設計のときには、コピーを切り抜いて、機器1点1枚の絵カードをつくり、クライアントに見せて、セレクトやレイアウトの相談をしたりしている。

木村 優

基本計画にとりかかる時に、計画のアウトラインを掴むため、次のような資料集成の利用をします。

計画に該当の図版を資料集成から複写し、これを縮小ないし拡大して、はさみとスプレー糊により切り貼りをしま

す。これにより配置・建物のボリューム、面積の配分などをチェックします。この方法はしごく大雑把なものですが、時には貼り込んだものにより、インスピレーションが湧くこともあります。この方法の何よりの長所は、考えるスピードに手のスピードが伴うため、トライアンドエラーのくり返しが素早くできることだと思います。また、1:200とか1:500程度の縮尺率の大きな図面の場合は、ドロ잉の精度による縮尺のカン違いを予防するという副次的な効果を生む場合もあります。通常はこのようにして作成した切り貼りを再度複写して、この上でエスキースを始めるといったことが多いようです。

吉澤 晋・国立公衆衛生院建築衛生学部長

できるだけユニークな利用法を求めるとのこと、大変に申しわけありませんが、ごく普通の利用法しかして居りません。

すなわち、机から1~2m以内の所において置いて、何かの問い合わせ、資料作成などに対して、学会での定説レベルのものとして利用する場合があります。

また、教育用の資料の原図として、切りばりゼロックスを駆使、利用させていただいております。

管野 義隆・共同建築設計事務所

1. 設計のイメージ発想段階での利用

i) 設計にあたり、資料集成の単位空間→建物→形態→地域等の部分を通覧して、部分から全体への構成の手法等を発想、エスキースの段階で参考にする。

ii) 各種建物の類似空間を横ならびに見ることが出来るので、固定しがちなイメージから、基本にかえて考えるきっかけとして利用する。

2. 施主の設計説明資料としての利用

環境の資料、単位空間、同種の建物の資料などを設計説明資料として利用する。

3. 知識の吸収

日進月歩の技術的知識等、広範囲にわたる知識を学習するために目を通す。

4. その他

i) 複数で設計する際、基本的認識を共通にするための資料とする。

ii) 空間の基本事項、寸法等を知るために見る。

iii) 概略を記憶しているだけの建物等の明確な資料を知るための参考とする。

永瀬 克己・法政大学助手

設計の当初は、なるべく資料集成は考えずにいくことにしています。自分のこれまでの肉体化された経験から、物事を始めています。日ごろ、沢山の情報に攪乱されることが多く、情報整理は弱いと自認していますので意識的にそ

うしているのかもしれませんが、しかし、そのようなものは置かないというのではなく、むしろ座右の書になっています。自分の考え、発想の勢いが壁にぶつかったとき、辞書を引くごとく、べらべらと繰っていきます。マクロ的な部分は「地域編」、建築設計は6巻「生活」以降を。部分設計は、「単位空間」と「物品」、原論的なものは「環境」というようにケースバイケースです。それを見はじめるとビジュアルなので、つい終わりまでみてしまい、結果として何度も目を通してることになります。自分の考えがどの辺なのか、位置を見定めることができるので、それは、私にとっては、案内板、里程標のごときものです。

伊藤 克三・摂南大学教授

建築環境工学の研究と教育にたずさわっている者として、関連するのは1—環境であるが、私の職務としてこれを有効に利用することは残念ながら少ないといわざるをえない。研究用の資料集としての利用価値は本来持たせてあるものではないのでまず見ることはない。講義の際に1—環境の紹介をし、時には一部のコピーを学生教材として利用する程度である。環境編に関する限り、利用目的をどこに置くかを深く考えることなく、資料を集成した感が強く、果たしてどのような利用がなされているのか、編集にあずかった1人として気にかかることである。

宝木富士夫・NTT 建築部設計課

どちらかという設計プロセスの始めの頃、企画段階でよく利用します。オーバーフローして記憶の外となってしまう情報も、この本の中にあると思うと安心ですし、これというものを探し出して次々といもづる式にたどって行ったり、また思わぬ所にヒントがあり、思考を発展させるきっかけとなったりします。まだ海のものとも山のものともわからないのに、「物品」や「環境」を見ることがあったりして、建築思考の振幅の大きさに驚くことがあります。昔は資料集成にあることは金科玉条のごとく考えたことがありましたが、今はそんな気持ちにはなれません。これに頼ろうとするよりもむしろ疑ってかかる方がよいと考えます。

このように、一種の百科事典のように使っていますので、郵便局や電話局のような特殊な建築も掲載されて良いと思うこともあります。

森保 洋之・広島工業大学助教授

私は大学での建築設計・計画の授業にて、資料集成を次のように日常的に活用している。

General な計画講義上の利用；建築計画の授業にて、各種建物別に講義する際、6～8集の各概要は要領よく整理されているので、ゼネラルに教える場面でよく利用している（チェックリストとしても…）。

設計課題認識上の活用；建築設計、計画演習という授業にて課題を出す際、課題に類似した機能、規模、空間構成等について、まず学生に認識させる上で、6～8集の各事例は便利で、よく学生に利用させている。同一的スケールで事例が示されている点は、スケール感を学ばせる上でも特に有効である。

dimension planning 上の活用；計画演習という授業では、空間の総合化にむけてステップごとのトレーニングを行っているが、そのステップの1つに「単位空間」があり、大きさ、環境、他にわけて学生にチェックさせている。このうち、2～3次元のスケール・ボリュームのフィジカルな検討に際して、人・物・動作空間・単位空間といった2～5集は極めて利便で、殊に学生に活用させており、min・med・max といった幅をもった寸法計画も具体的に求めさせやすい。

寺田 秀夫・武蔵野美術大学教授

資料集成の本来の使い方については、旧版と目立つような違いはない。ただ新版の構成が、使い勝手からよくなったか、あるいは悪くなったかと言った議論は当然出てこよう。“単位空間”の一部を担当した者として、この辺りの一般の評価がどのようになされるかについては、大変気になるところであるが、手際のよさはとにかくとして、方向としては正しかったと考えている。

さて、日ごろユニークな使い方を心がけているわけではないので、敢て言うほどのことでもないが、5集までは、あるレベルで適当にピック・アップすれば低学年用のテキストとして使用できる内容である。10集“技術”も新版の特徴的な企画で、また別の意味で基本的な内容となっており、これも同様の使い方ができよう。残念なことに旧版にあって新版から除外されてしまった製図、形、MCについては、将来是非とりあげていただきたいと思っている。

田中 正孝・中部大学建築学科教授

日常的な利用法は、建築計画の講義、設計演習の指導に教材として使っております。

計画の講義内容に応じて、ページ単位、あるいは単独の資料をプリント化したり、OHPフィルムにコピーして示しますが、グラフなど編集上図版の制約があったものは、OHPの拡大投影などで、学生の理解の訴及力を補っております。

また、計画資料調査などのレポート課題では、旧集成の設計データも無視しがたく、両集成にわたって調べさせることが計画の時代的な変遷を理解させるのに有効です。

設計演習では、課題についての設計条件を構成してゆく過程での情報検索手法習得のパターンとして、集成全巻を製図室に常備し、各自に設計資料作成を試みさせております。

いずれにせよ、かなり、コピー化して、教材、あるいは

資料としており、学生の教育の観点からは、それを前提に、今後も使っていくものと思います。

荻原 正三・工学院大学教授

ごく普通の利用法ですが、6, 7, 8巻の学校、図書館、病院、事務所、コミュニティ施設などの概要はじめ、基本事項の部分と若干の事例を大学建築学科3年生の建築計画と建築設計の副教材としてコピーして利用させていただいています。公共建築の主要な種類について1年間で概要を説明するために、関係する集成をすべて買わせるわけにはいきませんので、最低限のコピーを利用させていただいています。

曾根 幸一・環境設計研究所

今回の改訂で特徴的に感ずるのは、建築や都市を構成する部品を体系的に分解した点にあるように思われます。建物の種類や性格は、日ごとに複雑化していますので、基礎的、原理的なものにもどそうというのは価値のある作業だと思います。とりわけ物品編などは歴史的な労作でしょう。ただし私たちが日常利用する際に、目的のものを探すがややもどかしくなった気がします。建物の種類でばっとでてくるという便利さが減ったことは否めません。そんなわけで私の事務所には新旧両方の資料集成が使われているのが実状です。

原理的、基礎的なものを総合する能力が欠けてきたのか、日常があまりに多忙すぎるのか、あるいはXEROXが発達しすぎたためなのか、資料集成をうばいあうような場面が少なくなっているのは確かです。これは大学の学生にも言えそうな気がします。

川崎 衿子・アトリエ群川崎建築設計室

一番多い使い方は、空間あるいは環境構成に必要な基礎資料を各巻より抜き出し、コピー技術をもって独自の編集をし、教材として利用する事例である。住居学の立場からは、2~6巻までの使用頻度が多く、他の文献などと組み合わせ有効に使用している。次には、実際の建築設計の場で、デスクサイドに置いて設計資料とすることである。その場合は、特に寸法、数値のデータが必要なわけであるが、全く違った使い方をしてる例を身近に見て改めて利用の範囲の広さを感じている。それは漫画家(イラストレーター?)の例であるが、彼は「2. 物品」を愛読書として抱え込んでいる。物を思い浮かべる時の形の確認やまた「2. 物品」を見ながら想像の枠を広げる手だてとして重宝しているとのことである。

山内 毅・山内設計室

資料集成は手引、あるいは概要を知るためのものとして

使っています。

当然のことかもしれませんが、つっこんだ検討をするためには別に専門書が必要となる場合が多く、その際は二重手間をさけるために資料集成での検討を除くこともあります。

また、若い所員に対して、設計上のチェック項目を説明する際の資料にもなっています。使用頻度の高いものは、環境・物品・単位空間 I (人間工学) です。

飯島 静江・日建設計環境アセスメント室

① 建築に係わる専門的データを素人の人に簡単に、やさしくしかも正しく説明する場合(表現がこの条件を満足するFigに限る)

② 自分の専門外の建築に係わる基礎データを短時間に、的確にその概要を把握する場合(表題のテーマがFigの中で表現しつくされているものに限る)

③ 報告書等外部に公式に発表する文書の中のデータとして引用する場合(出典が公に認められ、最新データを取りこんでいるFigに限る)

中岡 豊彦・PAC 技術士事務所

設備設計事務所に務めているのですが、この資料集成の利用法としては、

① 「環境」、「単位空間」および、「技術」に掲載してある技術データや表等を携帯用にまとめておき、打ち合わせ時に活用する。

② 立体系統図を書く時、物品のアイソメ図を複写してトレースを行う。

③ 基本計画をまとめる時、設備の方式やシステムを比較する場合があります。

その時に資料集成のシステムに図を参考にして、わかりやすく説明することができます。

小林 治人・東京ランドスケープ研究所

設計室スタッフの声を以下に要約します。

1) 昔(5~10年前)は良く利用したが最近利用率が下がった。理由は①専門図書が入手しやすくなった、②情報が古い、③駐車場など日本の実情にそっていない、④専門家向きでない、学生時代はもっぱら利用した、など。

2) 希望は①計画・設計のプロセスがほしい、②キャプテンシステムで利用できないか、③検索をもっと簡便にできないか、④設計の実作業マニュアルとしてもっと内容をそろえる、などでした。

良く利用している人は、設計のチェック(規格、寸法その他)に便利で実戦的であるなどの意見もありました。

渡邊 昭彦・豊橋技術科学大学助教授

私の資料集の利用法は特にユニークでも何でもないが、資料集のその情報量の多さを建築計画教育・訓練に活用していることである。私の大学のカリキュラムでは講義と一対で計画演習があり、現地調査等のフィールドワークと併行して、建物種別の講義の演習の際に、資料集に載っているプランをプラン分析・評価させ、評価能力の向上を図ったり、プラン構成力の弱い学生に日常的にプランを拡大模写させ、プラン構成感覚を得させたり、各自に平面から立面を想定させ、同一平面でいかに多くの立面ができ、かつプランとの適合感覚を評価させたり、文章部分から建物を構成するためのキーワードを探させ、それをテーマにプランニングをさせたり、プランを選ばせて設計者に替わって設計意図を述べさせる（設計意図とプランのまとめ方の訓練）、設計製図の時にクラスの代表者に各建物種別の資料の中から選ばせて資料集を作らせ、クラスに配布させる（資料作成能力の向上）等を行っている。このように資料集の施設資料の多さは1つ1つの課題をよく考えて設計していく能力とは別に、慣れさせ、多くのプランに接させるには非常に良い資料だと考えている。特にこの方法は土木から来た学生や低学年には効果があると考えている。

八木 幸二・東京工業大学助手

国際技術協力事業団から派遣されてシリアの都市、農村計画の手伝いに行くことになったとき、前任者から資料集を一式持って行くことと大変喜ばれると聞いて持参した。今では、建設省、ダマスカス市庁、アレppo市庁などにそれぞれ一式置いてあるはずである。

開発途上国の技術者の多くは西欧、東欧、米国などで教育を受けているので議論になると色々な国の設計資料らしきものを引っぱり出してきてなかなかまとまらない。日本の資料集は体裁がよく、図版が多いので人気があり、誰にも読めないのかえって不思議な説得力がある。しかし、私たちが帰ってきてしまったので今は本棚の隅でほこりまみれになっているのではないかと心配である。英語版を作ろうなどと考えるよりも、小見出しやキャプションだけでも英語併記になっていると随分助かるのと思ったことを覚えている。また、アメリカのグラフィック・スタンダードのような実用的資料に欠けている点も気になった。

日本建築学会編

建築学便覧

I 計画・II 構造

発行：丸善

日本建築学会がその総力を挙げ、全機能を傾注して12年にわたる歳月を費し完成した大著であり、旧版の得た建築百科全書としての長所をさらに生かすとともに、内外における最新の成果を細大洩らさず網羅。膨大なデータの全般を収録するため2巻に分けて構成し、最高の現代建築知識を提示。研究に、実務に、あるいは教育に総ての建築関係者必携の書。

I 計画 25 000円

II 構造 15 000円

■主要内容 「I 計画」基本事項 気象/量単位と単位の換算/物理化学的性質/数学/情報管理/建物災害、建築関連統計 建築計画 規模計画/建築人間工学/建築形態計画論/色彩、構法計画/設計方法論/安全、コスト計画/MC/地域施設計画/人口、住宅地施設、農村地域施設計画/住居/教育施設/医療・保健、社会福祉施設/図書館/宗教施設等 環境工学 熱、空気、光・色環境/音響/火災/建築物環境衛生管理/建築設備の総合計画/給排水衛生設備/空調・暖房・換気、電気、輸送、サービス設備 建築経済・積算・契約 建築活動・建築費/建物経営・不動産/住宅・土地問題等 都市計画 基本的事項/都市と都市計画の必要性/調査と分析/広域計画/都市基本計画/環境整備、地区計画/都市計画行政 歴史 「II 構造」力学 一般力学/材料力学/骨組、連続体の力学/構造物の動的解析/座屈/土質力学/力学的試験 構造設計 荷重、外力/基礎構造/木構造/鉄骨構造/鉄筋コンクリート構造/プレストレストコンクリート構造/鉄骨コンクリート構造/特殊コンクリート構造、組積造/立体、曲面構造 材料 石材、人造石/骨材/セメント/コンクリート、混和材料/セメント製品、コンクリート製品/左官材料、吹付材料/粘土製品/ガラス製品/鉄鋼とその製品/非鉄金属とその製品/木材・竹材とその加工品/材料の製定と設計等 施工・仕様 工事の管理と監理/施工計画/地盤調査/仮設工事/土工事/地業工事/コンクリート・鉄筋コンクリート、プレストレストコンクリート工事/プレキャストコンクリート工事/鉄骨工事/防水工事/左官工事/金属工事/建具工事/内装工事/仕様書等

日本建築学会資料頒布所

〒108 東京都港区芝5-26-20 ☎ 03-456-2018